

テーマ「園・所内での人権研修をどうすすめていくのか」

常磐会短期大学 教授 ト田 真一郎さん

ゲストスピーカー〈えふらぼ〉 栗本 敦子 さん

人権保育専門講座8は、4回の連続講座です。家庭支援推進保育士の方を中心に、専門性を高めたい保育関係者の方々を対象に開催しています。

連続講座最終回となる今回は、家庭支援推進保育士が中心となって園・所での人権研修をどうすすめていくかということについて、Facilitator's LABO 〈えふらぼ〉の栗本敦子さんをお迎えし、「身近なことから、学び合う関係づくりをめざして～人権研修の推進～」と題してワークショップを交えながらお話しいただきました。

1. 保育者の影響力(ト田さんより)

子どもたちが担任の先生そっくりになっていくことってありませんか？

子どもたちの物事の捉え方、考え方、価値判断の育成において、担任の先生の存在はすいぶん大きな影響をもつのではないのでしょうか。そしてその影響というのは、決して保育で接している期間だけで収まるものではありません。その後の子どもたちの物事のとらえ方、考え方にも影響を与えていきます。そう考えると、保育者が“あたりまえ”と思っていることは、ほんとうに“あたりまえ”なのだろうかと気になります。「この見方ってどうなのかな」と、自分を揺り動かして確認し続けたいといけないのではないかと思います。

例えば、子どもに「やってはいけません」ということ伝えるときに、はじめから叱らず、目線を送って悟らせることってありますよね。あの目線を送るタイミングは、保育者それぞれの価値観によって違います。となりの先生と、目線を送りたくなるポイントやタイミングは違うわけです。そういったところにも、価値観の違いは出てきます。そのちょっとした立ち居振る舞いや返し方で、子どもたちの中に育つ感覚は変わってくるということを私たちは意識する必要があります。



先日、ある卒業生から相談を受けました。

現在5歳児クラスで担任しているAちゃん（男児）は、ピンクや赤や紫色が大好きです。服や靴や鞄も、当然大好きな色を選びたがります。ところが、Aちゃんを昨年担任したベテラン保育士から、こんなことを言われたそうです。

「Aちゃんはいつもピンクや赤や紫の服を着るということで、このままいくと、この子は小学校に入学したあとおそらくいじめられるだろう。そして、いろいろ苦勞するだろうから、服の色を注意して、『男の子がその色を選ぶのは違うよね』とお母さんとAちゃんに気づかせてあげるのが担任の先生の役目でしょ。私は昨年そうやって指導してきたので、今年の担任のあなたにも、継続して指導してもらわないと困ります」と。

Aちゃん自身も、好きな色の服を買うときに「〇〇先生に怒られるかなあ。でも、やっぱりこれがいい」と言って自分で選ぶのだそうです。

その卒業生とは、園内で問題提起をしてみてもどうかと、資料となりそうなものを渡しながらか話しています。また、もし本当にAさんがいじめられることがあったとしても、最後までAさんの側に立てるのは家族なので、家族がAさんを支えられるように働きかけていく必要についても話しています。

そしてなにより、保育者自身が物事の見方、考え方、とらえ方を問い直し、自身を鍛えていく必要があると感じています。

2. 身近なことから、学び合う関係づくりをめざして(栗本さんより)

わたしはワークショップのファシリテーターをしています。参加者がともに学び合える場をつくりだせるような“手法”と、人権について身近なことから考えたり気づいたりできるような“内容”について、みなさんとともに考えていきたいと思います。

「ワークショップ」とは、「工房」とか「作業場」という意味をもつ言葉です。いわゆる「講義」では前に立つ人が知識や答えをもっていて、参加者がそれをきちんと受け取るところをめざすのに対し、「ワークショップ」では参加者が体験を通じて“一人ひとりの学び”を創り出していくことをめざしています。ですから、人権についてワークショップをするということは、本に書いてある定義を覚えたり、誰かの講義を引用したりするのではなく、「私にとっての“人権”とはこういうことだな…」と一人ひとりが実感を伴って、ご自身の体験や生活に根ざして語られることを目標としています。そして、そういう気づきや学びの場を創り出せる人のことをファシリテーターといいます。



(※以下、実際にされたワークショップの中から一部を抜粋してお伝えします)

(1) あらためて、説明すると…

【5円玉の模様を描いてみよう】

これまで何度も手に取り見てきたはずの5円玉。そこに描かれている図柄をグループで協力して、改めて紙に描いてみましょう。



◆思ったより描けないことに気づく◆

繰り返し見ている物であったとしても、意識を向けて見ていなければ、実は把握できていないことがたくさんあります。日常的に見慣れている物、繰り返し見ているはずの物でも、あらためて意識を向けることで気づけることがあるし、逆に意識しなければ、ただ通り過ぎてしまうだけとなってしまいます。「日常のこと」、「あたりまえのもの」として流してしまっていることに少し立ち止まり、「人権」という視点で深くとらえ直してみましょう。そうすることで気づくことや発見することがあり、そこから意識することができるのではないのでしょうか。



【人間の特徵リストを書き出してみよう】

宇宙人に「人間」を説明します。そのために「人間の特徵リスト」を作成したいので、リストに載せる「人間の特徵」をできるだけたくさん書き出してください。



◆書き出したリストを見直してみよう◆

書き出したリストについて見直します。すべての人間に当てはまり、かつ他の動物には当てはまらない項目はどれでしょうか…。人権は、すべての人に保障されています。二足歩行をしていなくても、言葉を話さなくても、そのことで「人間ではない」として人権が奪われることはありません。人権という角度から「人間」を説明するとしたら、『人として生まれてきたこと』ただそれだけで十分なのです。

出し合われたリスト（例）

- ・二足歩行をする
- ・服を着ている
- ・国によって文化が違う
- ・言葉を話す など

けれども、私たちはついつい“あたりまえ”の想定でいろんな人を取りこぼしてしまいがちです。「人ってこういうものだよね」と安易に考えてしまうことが、だれかにとって「しんどさ」や「居心地の悪さ」を強いることにならないでしょうか。



例えば、「二足歩行があたりまえだ」という前提に立ってしまったら、「建物の入口に階段が数段あるくらいはあたりまえ」になってしまいます。でも、その段差が障壁となって建物に入れない人がいます。「人は本来多様な存在だ」という発想を前提に行動できる人が増えていけば、すべての人が生きやすい社会になるのではないのでしょうか。

(2) 「ふつう」って？

【日常の“ふつう”から考える】

次の文章に出てくる「ふつう」の使い方に、気になることやひっかかることはありますか？

状況1

何人かで雑談をしていたとき、ある人が同性愛者について差別的なことを言いました。それに対してAさんが「そういう言い方はよくないと思う。性のあり方はさまざまなんだから」と言ったところ、「もしかして、あなたも同性愛なん？」と聞かれたので、Aさんは「ちがうよ、私はふつうやけど」と答えました。

状況2

Bさんは被差別部落の出身です。職場の人権研修を受けた帰り道、同僚に「じつは、わたし部落出身やねん」と話しました。それに対して同僚は、「え、そうなん？Bさんふつうやし、ぜんぜん気づかへんかったわ」と言いました。

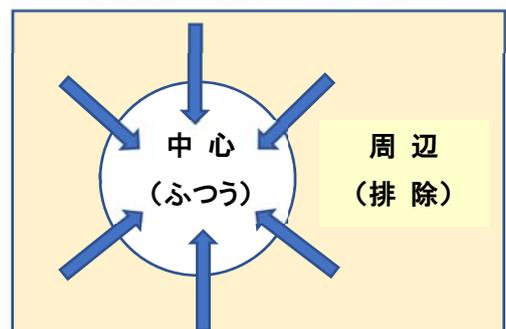
状況3

Cさんは小学6年生。やんちゃなところがあり、思いがけない行動をしてまわりを驚かせることもあります。あるとき、クラスメイトともみあいになり教室の窓ガラスを割ってしまいました。けが人は出ませんでした。保護者会で問題になり、「先日、テレビで発達障害についての特集をみたんですけど、Cさんのためにもふつうの中学校はしんどいのでは…」という発言がありました。

《次のことについてグループで意見交流しましょう》

- ①この「ふつう」を使っている人は、どんな意味・意図で使っているのか。
- ②その「ふつう」の使い方というのは、一体何が“危うい”のか
- ③その場にあなたがいたとして、あなたはどう受け答えするか

「差別」というと、多数派が少数派を上から目線で見、偏見をもって攻撃するという、上下での関係性でとらえられがちです。それだけでなく、「中心」と「周辺」という関係性でとらえることも大事です。多くの人は「ふつうでありたい」と思っているだけで、例えばセレブになりたいとか、ノーベル賞を受賞したいとか、「人より優位に立ちたい」というよりは、「ふつうでありたい」と思っているだけなんですね。そうして「中心（ふつう）」だけを意識していることで、知らず知らずの間にそこには入ってこない「周辺」の人を「ふつうではない」と排除してしまいます。でも、「お前はあっちに行け！」と誰かを積極的に遠ざけているわけではありません。「ふつうでありたい」と思い、中心を向



いていることで、いろいろな理由で周辺に位置づけられた人を、「ふつうではない」ととらえ、結果として排除しているのです。

差別というのは、悪意をもった不利益な取り扱いだけではなく、「ふつうでありたい」という多数派の意識が知らず知らずのうちに社会の中で生きづらい人を生み出している構造のことでもあるのです。

～「多様である」という前提～

冒頭の事例（P2 卒業生からの相談）で例えると、かわいいピンクや紫色の服が好きな男児は「ふつうになれない」と言っていることになります。ベテラン保育士は「それはとてもたいへんなことだ」と子どもに伝えていることになり、いろいろな色が好きな子どもが排除されていくという図式を強化していることになります。良かれと思って「ふつうでいられるように」と働きかけることが、結果として排除につながっているのです。

そうではなくて、「好きな色も人によってちがうよね」というように、もともと「多様である」ということを子どもたちに伝えるべきなのです。

とはいえ、単に「みんなちがって みんないい」ではありません。「みんなちがって、みんないい」はずなのに、ある「ちがい」は認められ、またある「ちがい」はそのことだけで不利益を被ったり、否定的に扱われたりするという現実があるからです。私たちには、そういった差別を構造的に読み解く力も必要です。

保護者と話すときには、「その見方・とらえ方では危険！」とすぐに話を切ってしまうのではなく、保育者自身も差別につながる「危うさ」に気づくことができ、差別をせず、差別をなくす行動につながるようなかかわり方に努める必要があります。



～「その質問って、どうなん？」～

状況1で、「もしかして、あなたも同性愛者なん？」と聞かれたら、その人はどう答えるのが適切でしょうか。ここで、「ちがうよ。私は異性愛者だよ」と答えることについてはどうでしょう。もしそう答えた人がいたら、この質問者はその人以外にも同じような質問をするかもしれません。「じゃあ、あなたはどうなの？」「ではあなたは？」という具合に。そして、もしそこに同性愛の当事者がいたら、それは究極の選択を迫られることになります。したくもないカミングアウトを強えられるか、自分を偽って異性愛者のふりをするか。つまり、この質問自体が差別的なのです。「その質問って、プライバシーの侵害じゃない？」と、「答えない」という選択ができるところまでになりたいものです。

実際に答えなかったら、おそらく「あの人が答えなかったから、きっと同性愛者なんじゃない？」とヒソヒソ話が始まるかもしれません。でも、そのヒソヒソ話も引き受けるということが、「『ふつうでありたい』ということに加担しない」という行動なのだと思います。



当事者以外の方が課題意識をもって「差別をやめよう」「差別をなくそう」と発信することも重要なことです。しかし、「私は当事者ではないのですが、でもその問題は重要だと思います」という発信の仕方については、『ふつうでありたい』という社会構造は維持されたまま、どこか他人事として差別の問題が語られてしまう“危うさ”を含んでいると、私は思うのです。



(3)保護者を取りまくもの さまざまな見方・とらえ方

～ジェンダーをふり返ることをとおして～

【こんな場面、どう感じる？どうかかわる？】

次のような場面に出会ったとき、あなたはどのように感じますか？どうかかわりますか？

ある日の保育園でのこと。ほとんどの子どもたちは、お迎えが来て、残りは数人となった時間。ふと外を見ると、入り口の門の脇でケータイでメールしている（残っている子の）保護者の姿が…

子どものためにも少しでも早く迎えに来てほしい、ケータイは後にして、という意見がよく出ます。

そのとき、保護者の姿としてイメージしたのは、お母さんとお父さんのどちらだったでしょうか。そのちがいによって、見方・とらえ方に変化はないでしょうか。お父さんのお迎えを想定して、スーツ姿のお父さんが、門の脇でメールを打っていたのだったら、「忙しそうだな。取引先と連絡でもしているのかな…」などという受けとめもあるのかもしれない。

実はこの場面は、私の友人の体験をもとにしています。友人は母親です。ショッピングモールに出店するお店で店長をしている友人は、子どもを迎えに保育園に向かっている時間も、お店に残っている店員と連絡を取り合う必要がありました。この日は、保育園に到着した後もお店と連絡を取り合っていたそうです。お迎えのあとは、子どもに集中するためです。けれど、母親の姿を見つけた園長先生に、こう声をかけられたそうです。

「お母さん、何してるんですか！早くお迎えしてあげてください。

お子さんずっと待ってますよ！」

保育士の側からすると、『子どもを大事にしたい』という思いから、つい指摘が多くなってしまわないでしょうか。そのとき、特に母親に対しては期待値が高くなってしまいう傾向があると私は思います。でもそのことが、母親を追い込んでしまうということも、しばしばあるように思えてなりません。誰からも言われてなくても、「母親なのに不十分だ」と自分を責めている人



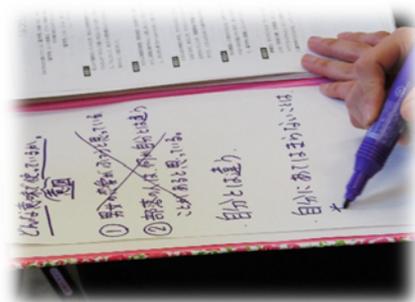
も少なくありません。「お母さん、仕事大変なのに、よくやってる！」と母親をエンパワーすることが、母親が子供にかかわる余裕となり、結局は子どもを大事にすることにもなるのではないのでしょうか。

～自分を知ることから～

だれしも、自分の生き立ちの中に「傷」をもち、それが癒されないまま保護者となっていることはないのでしょうか。子ども時代に親や周りの人から言われたりされたりしたことで傷ついたことは、だれでも経験していることでしょう。それが“つらい思い出”として心に刻まれるのか、自分のなかで乗り越えた経験となっていくのか。いろいろな受けとめ方が、その人の子どもへのかかわり方にもつながっていると思うのです。だからといって、保護者の心のケアをすることは保育士の仕事の範ちゅうを逸脱しているとは思いません。ただ、頭の片隅にはそのような可能性もあるということを知っておいてほしいのです。表面的なことや勝手な思い込みで保護者の行動を“ジャッジ”するようなかかわりだけは、避けたいものです。例えば、生活保護を受給しているなど、表面的に把握できる事情ばかりでは当然ありません。ですから、「ふつう」を安易に想定せず、「いろいろなことがあり得る」という想定のもとでのかかわりを積み重ねていくなかで、はじめていろいろな事情が保護者から語られるものだと思います。

そうなってくると問われるのが、私たちの中の「ふつう」とか、「あたりまえ」という価値観です。そこで、まずできることとしては、自分がどんな「ふつう・あたりまえ」という枠組みをもっているのかを自覚するということです。相手を理解しようとするものの前に、自分の価値観を自覚すること。簡単そうで難しいですが、そこから始めてみることはないのでしょうか。

今日お話しした手法や題材が、みなさんの職場での学習会や研修会をするときの、なにかヒントや手掛かりになることがあれば幸いです。



3 人権保育推進のための「次の一歩」を考える（未来への種まきワーク）

* 今回の講座を受けて、人権保育の推進にむけ「次の一歩」として自分が行動することを書き出しました。*

- ・ 「ふつう」という言葉のもつ重大さを意識して使うようにしたい。
- ・ 自分の「ふつう」を問い直してみよう。
- ・ 「ふつう」って何かなって、園でみんなにきいてみようと思う。
- ・ 自分の中で、職員と保護者の方と、「ふつう」って何か考えてみたいと思います。
- ・ 「わたしの・ぼくの権利」を読んでいて、いろんな人の顔が浮かびました。来週からたくさん声をかけようと思います。
- ・ 子どもの立場には立って考えるのに、保護者の立場には立っていないかもしれないとほっとさせられました。相手の背景を知ろうとする気持ちをいつも頭においておきたい。



- ・ 「ふつうさー」と言ってしまうこともよくあるので、「これってふつうかな？」と一度考えてみるようにする。
- ・ 普段の生活の中で、もやっとしたことを周りに伝えてみる。
- ・ 日常に隠れている「あたりまえ」「ふつう」に気づかず使ってしまったいないか振り返る！いろいろな角度、思いで話すこと、聞くことを大切にする。
- ・ いろいろな角度から見るのが大切。いろいろと揺れ動く、考えることをこれからも続けたいです。



《参加者アンケートより》

- 人と話をする前に、まず自分の意識がどうだったのかを振り返るきっかけになりました。またそれを考え合うのに、とても分かりやすく使いやすい方法を教えていただき、とても勉強になりました。すぐに活かしていきたいと思います。
- 園内研修では、どのような研修にするか毎回悩むことが多いです。ですが、人権に関する学びは日常のあらゆるところにあるので、それに気づける自分になりたいし、気づいたときに、まわりの人にも「これってどう思う？」と一緒に考え合っていきたいと思いました。
- 人推として、園内研修をすることが多いのですが、いつも皆が“考える”会にするにはどうしたらいいんだろうと悩みます。身近にある例から人権の視点が考えられることをあらためて感じました。早速園に持ち帰って、園内で考えてみたいと思います。
- 今の差別の実態として、「悪意はなく知らず知らずのうちに…」という意識がはたらいているとあらためて思いました。
- 自分の中の「当たり前」の枠組みを見つめ直すということは、人権保育の一步でもあるということが印象的でした。保育の現場でついやってしまいがち、言ってしまうがちなことも人権的にどうなのか、日常での自分をみつめ直すようにしたいです。
- ワークショップをとおして、たくさんの意見を交換できてよかったです。身近なことから「これってどうなのかな？」と疑問に思うことを大切にしていきたいと思います。自分の中で“あたりまえ”が“決めつけ”になっていないか注意し、ふりかえっていききたいです。

